町娘覇王伝

きちろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
町娘覇王伝

【Ｎコード】
Ｎ０６０８Ｌ

【作者名】
きちろ

【あらすじ】
とある平凡な町娘。彼女が一つ人と違うところを挙げるとすれば、それは誰よりも強いこと。そしてある日、町娘は旅に出た。それは打倒魔王ならぬ打倒勇者を目指した、果てしない旅への始まりだった…。

事の発端

コンテルトの町に住む、マーシャ＝ボネットは極平凡な町娘である。
早くに両親を亡くし、残された小さな食堂を弟と共に切り盛りする
１７歳の少女だ。
明朗快活でさばさばとした爽やかな性格で、やや背は低いが健康的
な容姿。
男勝りなのが玉に瑕だが、面倒見の良さやその性格からこの小さな
町では人気者だった。

それでも彼女は極平凡な人間、なんの変哲もない普通の人であった。

ただ一つ、違うところがあるとすれば――――彼女は誰よりも強かっ
た。

時には聡い魔術師にも、時には屈強な戦士にも。
如何なる者にも負けを知らぬ彼女は棒切れ片手に魔物を伸したとい
う伝説まで創り上げた。

その噂を聞きつけ、勝負をしろと挑まれることは多々あった。
町に襲い来る魔物を追い払うこともそれなりにあった。

それらの結末には、常に彼女の手に勝利が握られていた。

しかし連戦連勝無敗の彼女は、己から勝負を持ちかけたことは一度
だって無かったのだ。

あの日が来るまでは。

「姉ちゃん、大変だよ！」

マーシャのたった一人の肉親である、弟のラッセル。
彼は今年でめでたく１０歳を迎えた少年で、少々変わっているが姉想いの良い弟だ。
そんなラッセルが、一人食堂の掃除をするマーシャの元へと駆け込んだ。
ふわふわとした猫っ毛がいつも以上にはね回っているのを見ると、相当急いでいたらしい。
塗装の剥がれ掛けた木の扉が、開け放たれた勢いでギイギイと耳障りな音を立てる。

「なんだラッセル、さっき遊びに行ったばかりなのにもう帰ってきたのか？」

今日のボネット姉弟が営む小さな食堂は、定休日なのだ。
そのため昼間という稼ぎ時にも関わらず室内にはマーシャ一人しかいない。

「うん、そうなんだけど…。それより大通りでバケットのオヤジがまた喧嘩してるみたいでさあ」

ラッセルの言うバケットのオヤジとは、近所でも有名な酔っ払いオヤジである。
根はそう悪い男ではないのだが、兎に角酒癖が悪い。飲んでは暴れるのが常だ。
故に、よくこう言った騒動を起こす男なのだ。マーシャは小さくため息をついた。

「またバケットさんか…」

「うん、それで皆が姉ちゃん連れて来いってさ」

「たまには私が行かなくても大丈夫なんじゃないか？」

「ダメダメ！今回は町に来たばっかの旅人に絡んじゃって、もう大変なんだって」

ラッセルは両手を頭の後ろで組みながら、にんまりと悪戯っ子の笑みを浮かべた。

「それに俺、姉ちゃんが戦ってる姿見るの好きだし」

壁にかけてあった太い木の杖を、渋々と言った様子で手に取る姉の後ろ姿を目で追う。
マーシャは眉間に皺を寄せ、露骨に不機嫌を表した態でくるりと振り返る。結い上げられた髪の毛が、さらりと揺れた。弟と違って直毛であるが、そこに大それた因果関係はない。

「馬鹿、遊びじゃないんだぞ」

それにやりたくてこんなことしてるんじゃない。
マーシャはぶつぶつと文句を吐きながら、太い杖を片手に開け放たれたままの扉から外に出る。その後に、今だ口元に笑みを保ったままのラッセルが続いた。

大通りに出ると、なるほど人だかりが出来ている。

「おーい、我が家の親玉連れてきたぞー！」

ラッセルはゲラゲラ笑いながら大声をあげ、人だかりを押しのけていく。
町の人々に色々なお言葉を貰いつつ、マーシャもその後に続いた。

「バケットさん！アンタなぁ…！」

マーシャが人々の煩いざわめきに負けぬよう、声を張り上げながらこの先にいるであろう人物の名を呼んだ。マーシャは人集りを抜け、騒ぎの中心へと到達する。

それと当時に、彼女と一歩前に立つラッセルの足元に、一人の男が仰向けに倒れた。

「なっ…！」

その男は今まさに名を口にしたバケットなる人物で。マーシャは驚愕した表情を浮かべる。

「オヤジ！？おい、オヤジ！大丈夫かハゲッ！ハゲェェェ！」

どさくさに紛れて散々な罵倒をしながらかがみこむラッセル。息は有る。強い打撃を受け気絶しているようだ。ざわめいていた（一部の喧嘩を煽るような罵声も含め）人集りは、水を打ったように静まり返る。

「チッ…なんだ、やっぱりその程度かよ」

マーシャがバケットから目を離し、そのまま目線を上に持っていくと――。

「せめて人に喧嘩を売れる程度の腕になってから酒呑めよな、酔っ払いが」

漆黒の髪に真紅の瞳。きりりと涼しげに整ったその顔立ち。そしてまさに俺が王様だと言わんばかりの図々しさが全身から滲み出る青年が立っていた。逆光を浴び、風にはためく紅いマントが様になっているが、そんなことはどうでもいい。

「アンタ…」

「なんだお前、なんか文句あんのか」

実に柄の悪い口調である。青年は酷く気だるそうに欠伸をした。し

かし青年を見据えるマーシャを見、青年はなにか思い出したかのように表情を変えた。

「もしかしてお前、マーシャ＝ボネットか」

「…そうだと言ったらアンタはどうする」

マーシャの答えに、青年は綺麗な形をした口を両端に吊り上げ、実に悪どい笑みを浮かべた。腰のベルトにさした剣を鞘から引き抜くと、ゆっくりと剣先をマーシャに向ける。

「そうだな、是非とも手合わせ願おう」

事の発端（後書き）

初投稿です、すみませんでした。
拙い文章ですがこれからよろしくお願いします。

誤字・脱字、その他何かありましたら是非教えてください！お願いします！

町娘、物思いに耽る

――――あれからもう暫く経つのか。

木製の椅子に深々と座り込んだマーシャは、静かに目を瞑る。
あの男に勝負を挑まれてから、早三ヶ月。

彼女は今、コンテルトの町から遠く離れた、大きな街の小さな宿屋にいた。
ところどころ痛みの激しい部分の見受けられる、所謂安宿の一室。
一人物思いに耽る。

マーシャは小さくため息を吐いた。
あの勝負で、彼女は生まれて初めて敗北したのだ。
思い出すだけでも悔しくて溜まらなかった。
なにより、屈辱的だった。

「なんだ、大した事ねぇ」
「なにがコンテルトのマーシャだ、雑魚が」
「やっぱり噂なんてくだらねぇな」

愛用の杖で挑み、そして惨敗したその後。
あの男が吐き捨てた言葉は、ぐるぐると頭の中を巡る。

腕っ節は強いとは言え、元より気性は大人しいマーシャ。
自ら争い事を起こしたり首を突っ込むような事はせず、穏便に済むならばそれで終わらせていた。

しかし剣先を向ける男は、何を言っても無駄であることが見て取れた。
バケットが何をしたかは知らないが、丸腰の酔っ払いを容赦なく倒すような男だ。
この勝負を断れば、この男はなにをするかわからない。
男の雰囲気から、マーシャはそれを感じ取っていた。

だがマーシャに勝利すると満足したのか、暴れだすような真似はしなかった。
代わりと言っては何だが、男はマーシャに飯を食わせるよう要求してきた。

「お前、飯屋やってんだろ」
「だったらなんか食わせろ、腹減った」

ラッセルは何事か喚いていたが、マーシャは黙ってそれに従った。
唖然とする人々の視線を感じる中、男を連れて食堂へと戻る。
敗者は勝者に逆らう事は出来ない。

それは今まで己に挑み負けた敗者達の姿勢から学んだものだ。
精神的にも肉体的にも、負けた直後は逆らおうにも逆らう事が出来ないのだ。

ただ、言うなれば彼女は無心であった。
その時は自分が落ち込んでいるのか悔しがっているのかすらわからなかったのだ。

ふてぶてしい態度でテーブルに座る男と、それを睨みつけながらも無言である弟。
背中でその二人の気配を感じながら、マーシャは料理を作る。

重苦しい雰囲気の中、一人寛ぐ男にマーシャは出来たての料理を運んだ。
その料理は今は亡き両親から受け継いだもので、また店の一番人気の看板メニューでもあった。
それを知るラッセルの眉間の皺が、更に深くなる。

マーシャは己が敗者である以前に、勝者であるこの男に最大限の敬意を払ったつもりだったのだ。

しかしそれを食べ終わった男は、ただ一言

「まずい」

と、吐き捨てたのみだった。
その言葉に、ラッセルは怒号をあげて男に掴みかかる。まだ身体の小さいラッセルはいとも容易く男に引き剥がされてしまったが、そ

の口から悪態が吐き出されるのが止まる事は無かった。
その時、初めてマーシャから感情があふれ出たのだ。
目の前が、瞼の奥から真っ赤になるような、激しい怒りと屈辱感。
自分どころか、亡くなった両親まで馬鹿にされたようで。
マーシャの口は何か考えるよりも早く、勢いのままに動いていた。

「おい！お前の名はなんだ！」

マーシャの怒気を前面に現した声に、ラッセルの悪態は止り、一瞬の静寂が流れる。

「はぁ…？」

「お前の名はなんだと聞いている！答えろ！」

一瞬呆けた声をあげる男だったが、マーシャの問いに底意地の悪い笑みを浮かべた。
そして、まるで嘲笑うかのようなアクセントを含んだ声色で静かに答える。

「ルーファス＝エルウッド、だ」

覚えたか？と、ルーファスは憎たらしく歪んだ笑顔で続ける。

「…ああ、覚えた」

「そうかよ。じゃっ、俺はもう行くぜ。
コンテルトのマーシャがただの女だってわかったからな、も

うこの町に用はねぇや」

くるりと踵を返し、ラッセルを押しのけ扉から出て行こうとするルーファス。

しかしその背に向けてマーシャは、憎しみを込めて言い放った。

「お前も！お前も覚えていろ、私の名前を！
いつか必ず、マーシャ＝ボネットはお前を倒す！だから覚えてろ！」

その言葉に、ルーファスは何も言う事は無かった。

ただ一度鼻で笑い、振り向くことなく店から出て行ったのだった。

こんなにも浅ましく心を動かすプライドが己の内にあったなんて、マーシャは知らなかった。

マーシャは再びため息を吐くと同時に、部屋の扉が勢い良く開く。

「姉ちゃん！外にすっっごいでけぇ飛行艇がとまってたよ！見に行こうぜ！」

そして酷く興奮した様子のラッセルが、今入ってきた扉の向こうを指差しながら捲し立てる。

マーシャはそんな弟を見て、三度目のため息をついた。

己の意地とプライドに突き動かされて、ルーファスの後を追い町を出ることにしたマーシャ。

勿論彼女と極親しい間柄にあった町人達はそれに反対した。彼女の

お陰で町が救われた事は多々あったが、旅と言うのは危険である。
マーシャの身に何かあってはいけないと、人々は必死に説得した。
しかしどう意見されても彼女の意思は変わることなく、ついに根負けした人々は、店のことやラッセルの面倒を見ることを約束してくれた。

だが、今度はラッセルがそれに反対した。自分もついていくと言って聞かなかったのだ。
勿論マーシャは反対し、一人コンテルトの町を旅立った。

しかし己の弟の執念と根性が実に凄まじいものであったことを、マーシャは知らなかった。

町を出てから三日後。
ラッセルは自身を預かってくれている町人の目を掻い潜り、一人マーシャの後を追って町を出た。

そして一週間後、ついに姉に追いついたのだ。

流石に引き返すには遠い距離に、マーシャは諦めラッセルの同行を認めた。
そして近場の町でコンテルトへ行く途中の商人に頼み、ラッセルがついて来てしまったことを書いた手紙を届けてもらったのだ。

それが現在に至るまでの経緯である。

「なぁ〜、姉ちゃん行こうよ！」

ラッセルはきらきらとした、喜色満面の顔でマーシャを見やる。

この弟といると、この旅がただの観光旅行のように感じてしまう。
しかし、お陰で暗い気分に沈む事はない。
それに関して、この明るい弟には感謝していた。

「わかった、行こう」

「よっしゃ！」

「だが露店があっても何も買わんぞ、見に行くだけだからな」

「…チェッ…」

盗難防止のため、少ない荷物を全て持ち、ボネット姉弟は宿を出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0608l/

町娘覇王伝

2010年10月14日14時59分発行